

AnotherView

視点を発見するパーソナリティ・ノート

パーソナリティ・ノート「AnotherView」の刊行は、様々な方のものごとの捉え方を書き留めていこうという企画です。「AnotherView」は美専（長野美術専門学校）が発行しますが、登場するのは美専の学生や先生だけではありません。社会の人にも、時には子どもにだって、自身の視点を表わしていただきたいのです。それらの方々の疑問やひらめき、課題や考えなどがここに明らかになっていくことで、多様な価値観が共鳴してさらなるクリエイティブが始まるでしょう。「AnotherView」はものごとの見方を変えてくれる、パーソナリティ・ノートなのです。

This time's Personalities

六川智博

内山彩夏

中村真美子



自分の想いを 外に出していく。 六川智博

SNS 発、世界行き！なんとあのルーブルにも！
「自分の思いや作品を発信し続けることって、本当に大事なと思います。」
（ビジュアルデザイン科卒業・研究科修了／グラフィックデザイナー・イラストレーター）

——『声に出して読みたい日本語』シリーズで日本語ブームを巻き起こした教育学者・齋藤孝さんの新刊『すごいメタ思考』（かんき出版／2025年3月発刊）で、イラストを手がけられたのですね！



「Instagram に投稿していたカビバラのイラストが編集者さんの目に留まり、お声がけいただいたのです。2023年に『ブレない心のつくり方』（PHP文庫）で挿絵を担当したのが最初で、そこからご縁が続いて今回が3冊目になります。ビジネス書は堅いイメージがあるので、イラストで親しみやすさをプラスしたいと思って取り組んでいます。」

——SNSへの投稿が出版のチャンスに繋がったのですね。
「自分の作品を発信し続けることって、本当に大事ななと思います。地道ですが、それが積み重なってチャンス

になることもあるのだと今回の経験で実感しました。」

——美専時代はどんな学生でしたか？

「美専時代はとにかく毎日が楽しかったです。同じ志を持つ仲間と切磋琢磨しながら、先生方からデザインの現場の話などリアルな話も聞けて、刺激的でした。社会学連携の活動にも積極的に取り組みました。長野市立博物館のシンボルマークや、長野市消防局のエンブレムデザインなど、自分の作ったものが実際に街で使われる経験は、学生の自分にとってはとても貴重な学びでした。」

——お仕事ではどんなことをされていますか？

「看板を中心にさまざまなグラフィック制作に携わっています。デザインだけでなく、ロゴ、名刺、パンフレット、イベントの装飾や空間演出までトータルで任されることも多いです。」

——デザインのお仕事で大切にしていることは何ですか？

「“誰に、何を、どう伝えるか”です。これは在学中に繰り返し先生に教えられた言葉で、今も制作の軸になっています。ただ“カッコいいもの”、“きれいなもの”を作るのではなく、その背景にある“伝えたい思い”をどう視覚化するか、それを常に意識しています。“あなたの思いをクリエイティブで応援したい”というのが私のモットーです。台風災害復興のためのクラウドファンディングのロゴ制作や、アフリカのトイレ建設支援のロゴなども手がけてきました。自分の得意なことが誰かの役に立つというの

は、何よりのやりがいです。」

——昨年はあのフランスの「ルーブル美術館」に、作品が展示されたそうですね？

「10月に『カルーゼル・ド・ルーブル』というルーブル美術館の地下展示スペースに、デジタルで描いてキャンバスにプリントした作品を展示してもらいました。展示は1日限りでしたが本当に貴重な経験でした。ギャラリーの方とご縁があって実現したもので、人とのつながりの大切さを改めて感じましたね。」

——美専の後輩たちに伝えたいことはありますか？

「“発信し続けること”ですね。SNSでも展示でも、小さなことでいいので、自分の想いを外に出していくこと。あとは人とのつながりを大切にしてほしいです。どんな出会いが将来のチャンスになるか、分からないので。」

——今後の夢や目標を教えてください。

「これからも“誰かの思いを、デザインで応援する”というスタンスを大切にしていきたいです。もっと多くの全国的な書籍の挿絵や表紙の仕事にも挑戦したいですし、個展も開きたいですね。自分のペースで、でも着実に前に進んでいけたらと思っています。」

くろくがわ ともひろ＞1992年長野市生まれ。2013年長野美術専門学校ビジュアルデザイン科を卒業後、研究科へ。当時設置されていた併修制度によって京都造形芸術大学（現・京都芸術大学）通信教育学部でも学びを深めた。2015年屋内外看板の企画・制作などを行う「株式会社アドイシグロ」（本社・長野市）入社。イラストレーターとしての創作活動にも意欲的に取り組む。

どれだけデザインを好きでいられるか。



一人の時間を大切にしています。
電車でも、スマホじゃなくて景色を見るようにしています。
(ビジュアルデザイン科3年制学科・2年次)

内山彩夏

——今年度は“美研”のリーダーに

「高校時代、美専の卒業生と話せる機会があり『美専は自由に学ばせてくれる。自分の頑張り次第で経験が変わるよ』と教えてくれました。積極的に制作活動に組みもうと入学時から決めていたので美研に入りました。今年度は新入生が9人入り部員は23人になりました。美研の魅力はイベントの参加などを通して先輩後輩が仲良くなれること、授業以外にも制作の機会が増えることですね。」

——昨年度の美専展では1年次生としては初快挙となるグランプリを受賞しましたね

「本当にありがたかったですし、自信になりました。ただ新たなプレッシャーも感じています。何かを生み出すときはとても苦しいですし、そんな時には入学前にデザイナーの先輩がメールで送ってくれたこの言葉を思い出す

ようにしています。それは『デザイナーはセンスや価値観のような自分の心に付随するものを批判される分、本当につらい場面がこの先絶対出てくると思うけれど、最終的な支えになるのは“どれだけデザインを好きでいられるか”の1点です。』というものでした。作品づくりで気持ちが沈んだ時には、“ずっとやりたかったことに今取り組んでいるんだ”と思い直すようにしています。」

——“Another View”が必要な時はどうしていますか？

「一人の時間を大切にしています。例えば通学で電車に乗っている時、スマホじゃなくて窓から外の景色を見るようにしています。通り過ぎていく風景は“発想の源”になるし、心の整理にもなるんですよ。」

くちやま さやか> 池田町生まれ。「美専展 2025」で“チカラ”をテーマとしたポスターデザインでグランプリを受賞。今年度「美専美術研究部」部長。

生きていけば何かしら見つかる。

中村眞美子

30歳の時、『自分の好きなことをちゃんとやらないとまずい!』と思い立ち、絵を描き始めました。
(版画家/造形科デザインコース卒業)



——版画家になるまでの道のりと今

「卒業後ビジョンもなくデザイン会社を転々としたが、30歳の時に『自分の好きなことをちゃんとやらないとまずい!』と思い立ち、絵を描き始めました。当時は技術も知識もなく、とりあえず何でもいから思いついたものを描いてみようという精神で描いていました。その頃版画教室の展覧会に行く機会があって、当時は技法すら知らなかったのですが(質感がいいな)と思って、その教室の先生にお願いして弟子入りました。版画に取り組む中で“何を誰に表現するのか”ということが美術においてとても大切だということも教えていただきました。師事した先生方も亡くなられ、今も日々葛藤はあるのですが、やっぱり『自分は版画家です。作品を作っています。』と

言わなきゃいけないのだらうなと思うので、これからも自分の表現を見つけていきたいと思っています。」

——後輩たちに伝えたいこと

「『とりあえず生きていけば大丈夫』ということです。これは当たり前のようでとても大事なことです。その場しのぎでもいから、とにかく生きてください。生きていけばきっと何かが見つかる。1つ1つの可能性を試すには時間がかかると思います。焦らずに答えを出そうとしない方が良いのではないかなと思います。」

くなくま まみこ> 1993年長野美術専門学校造形科デザインコース卒業。デザイン会社でキャリアを重ね、30歳で版画制作の道へ。2007年武井武雄記念日本画大賞・優秀賞など受賞。個展やグループ展なども多く開催。

Latest News

写真表現2025成果展

自身の表現と向き合い、与えられたテーマと葛藤

2025年6月14日(土)～6月18日(水)にかけて、サテライトキャンパス・美専ギャラリーにて「写真表現」授業の履修生による展示会が開かれました。写真のテーマとして、学生に課されたものは“社会と私”。この課題に、学生たちは真摯に向き合っていました。



find Another View



好きなことから、はじめよう!
学校法人 クリエイティブA
長野美術専門学校